No.88
2022. 3.10

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

CONTENTS

■カラフルな多文化共生の社会をめざして ……1〜3
第1部:写真とお話「カラフルなアジア」
第2部:地球の木の海外支援を考える
■30周年記念 会員アンケート……3
■ネパール現地報告……4
■カンボジア現地報告……5
■多文化共生セミナー「ともに考える多文化共生の地域作り」……6
■「対話カフェ〜みんなで話そう！多文化共生」(第1回)……7
■インフォメーション／活動日誌……8
■編集後記……8

カラフルな多文化共生の社会をめざして

設立30年を記念する地球の木講座が11月27日に行われました。コロナ禍のため、みんなで一同に集まることは叶いませんでしたが、Zoomウェビナーによる3時間に及ぶライブ配信に初めてチャレンジしました。

「三井さんの写真を見ると地球上の誰もが、同じ普通の人間であり生活者であることを実感します。今日は皆さまと共にカラフルな笑顔にあふれ、多様性に満ちたアジアを一緒に旅しましょう」という磯野昌子理事長(30周年実行委員会委員長)の挨拶でイベントはスタートしました。

ネパールの子どもたち(撮影　三井昌志さん)

第1部　写真とお話「カラフルなアジア」

ゲスト　三井昌志さん(写真家)

2022年の地球の木カレンダーの写真を撮られた三井さんは、アジア各地をバイクで旅しながら出会った普通の人々の日常の姿を撮影しています。今回はその中からカンボジア、ネパール、インドの国々の何気ない暮らしや人々の素晴らしい笑顔の写真を見せていただきました。トークもとても軽妙で、あっという間に時間が過ぎてしまいました。

カンボジアのある村人との出会いから、その村とのつながりが次々に生まれました。結婚式に招かれたり、生まれたばかりの赤ちゃんの名付け親になったり、言葉は通じなくても、人々のこだわりのないおおらかさに三井さんは魅了されます。

三井昌志さん

ネパールでも村人の家に泊めてもらい、人々の暮らしを写します。ビーチサンダルで重いかごを背負ってどんな山道もすたすたと歩く少女たちの姿に、「自分は役立たずだと思い知らされ、自分の限界を知ることもあります。私たちの便利すぎる生活は、生きている実感を持ちづらくしているし、今ある自分という殻に閉じこもっていると世界の本当の美しさは見えてこない。旅をして、いつもと違う日常に触れ、自らの限界を知り更に外へ一歩踏み出さなければ」と、三井さんはネパールの山村を歩きながら思います。

インドの写真は、まずは様々な物を作る職人たちのカッコいい姿、三井さんは彼らを「渋イケメン」と名付けます。ターバンと立派な白いひげはシク教徒の男性たち。近寄りがたい雰囲気ですが、話すと優しくて気さくなのだそうです。彼らは昔不毛だった土地(インドの北西のパンジャブ州)を灌漑し、近代農業を取り入れて、今は豊かな農地に変えたが、若者は農業に従事したがらず仕事を求めて大都市や海外に出ていってしまう。どこの国にも同じようなことが起こっているようですが、三井さんには、威厳と誇りを湛え農業に携わる渋イケメンに農業の高齢化が透けて見えました。

農地で働く時もインドの女性たちが着ている民族衣装は色鮮やかで実にきれいです。美しく着飾ることが、単調な農村の生活の中に彩をもたらしています。それはまた民族の誇りや美意識を反映しています。インドの多様性に惹かれ、インドが大好きと語る三井さんの説明には熱がこもりました。

■発行 特定非営利活動法人 地球の木 理事会　■発行責任者 磯野昌子　■編集 会報作成チーム　■事務局 〒231-0032 横浜市中区不老町1-3-3フェニックス関内2F
■TEL 045-228-1575　■FAX 045-228-1578　■E-Mail:chikyunoki@e-tree.jp　■http://e-tree.jp/

「それぞれの民族や人々には違いがあり、その違いが面白いから」と、それぞれの土地の、そこにしかないカラフルな色を求めて、これからも三井さんはまた旅を続けます。

三井さん撮影：昼寝をする水牛と子ども（ミャンマー）

❖ ❖ ❖ ❖ ❖ ❖

第1部終了後の休憩時間にはネパール、ラオス、カンボジアから送られた様々な動画や音楽を流しました。今回全体の司会を担当した田中理事自身がネパールの打楽器を演奏しています。

ネパールグルン族の音楽を演奏する田中理事（右）と友人

第2部　地球の木の海外支援を考える

地球の木は現在、ネパール、ラオス、カンボジアで海外プログラムを行っています。前半は、まず、それぞれの担当者（ラオス／中野真理子、ネパール／乳井京子、カンボジア／成瀬悦子）がこの10年を振り返り、何を目指し、何ができたのかを報告。後半は３ヵ所の現地のパートナーとつなぎ、彼らの声を聴きました。司会進行は、顧問の丸谷士都子さんが務めました。

海外プログラムの報告

ラオスのプログラム名は「森を守る・暮らしを守る」。JVC（日本国際ボランティアセンター）ラオスの「サワンナケート県農村部住民による自然資源の管理・利用支援プロジェクト」を応援してきました。サワンナケート県は海外からの経済投資が活発に行われ、開発が近年特に著しい地域でした。かつて豊かだった森がゴムやユーカリのプランテーションに代わり、水力発電のダムがあちこちに造られるなど、自然資源に頼る村の人々の暮らしは脅かされています。JVCは地域住民が森を持続的に利用しながら守っていくために村人に法律研修を行い、村境を確定し地図を作成、魚保護区やコミュニティ林の設置などを行ってきました。伝統的価値観を今も大切にしながら新しい開発のあり方を住民と共に模索し続けているJVCの基本的な姿勢を応援しています。

ネパールで参加型開発を推進するNGO・SAGUNのカマルさんは、「真の開発は地域の人々が主体になるべき」「開発は初めの一歩から住民主体で」と考えています。大いに同感し一緒に「幸せ分かち合いムーブメント」を始めました。ロシ地域の高校生達への奨学生支援は15年間で100名を超え、彼らに夢を与えました。その後大学院で学んだ人、村の学校の先生やNGOスタッフになった人など多くの卒業生が自ら歩む道を選択する自由を手に入れました。2回にわたる大地震があり、また洪水にみまわれ災難が続きましたが、常に村人たちとの話し合いを大切にしながら復興支援を行ってきました。今年度でロシ地域での「幸せ分かち合いムーブメント」はめでたく地方政府に移譲します。来年度からは新しい地域インドラサロワールで、教育の質の向上に重点をおくプログラムを始めます。

カンボジアでは、7年間の職業訓練センターへの支援（貧困ゆえに売られたり働かされたりする少女たちに、織、染、裁縫の技術を身につけ自立できるようにする）の後、2014年から、CWCC（カンボジア女性緊急救援センター）を通して、家庭内暴力や性的虐待などに遭った女性や子どもたちをシェルターに保護し、彼女たちが尊厳を取り戻して新しい生活を始めるための活動を支援しています。CWCCは法的なサポート、識字教育や職業訓練、また自立後のアフターケアなどきめ細かな支援を行っています。

CWCCの支援と共に大切にしている地球の木のクラフト販売は、生産者の自立を目指すフェアトレード品であることが重要です。カンボジアの生産者のうち3団体（Peace Handicraft、Fair Weave、Ta Prohm）を紹介し、地雷によって不自由な体になりながらも事業を立ち上げたオーナーの思いや、働く人たちの状況も伝えました。

支援地とつなぎ、現地パートナーの声を聴く

海外の3ヵ国とオンラインでつなぐというのは、初めてのことでなかなか大変でした。急に画面が変わったり、音声が聞きにくかったりもしましたが、ラオスのJVC駐在員の岩田さんとフンパンさん、ネパールSAGUNのカマルさんとマハンタさん、そしてカンボジア現地連絡担当のディナさんの笑顔はトラブルも帳消しにしてくれました。

こちらからの最後の問い「みなさんの国で自慢できることは何ですか」に、フンパンさんは「助け合いの文化を誇りに思う」、カマルさんは「人々が温かい心を持っていることが誇り」、マハンタさんは「人々がとても誠実であること」、ディナさんは「アンコールワット」「人々の親切と笑顔」と答えてくれました。

短い時間でしたが、彼らも今回の企画をとても楽しみにしていてくれたことが良く分かりました。私たちも3つの国を身近に感じるとともに、これからもこのような機会を設けていけたらと思います。

第２部のパネリストたち

（右上）ネパール カマルさん
（左中）ラオス 岩田さんと
　　フンパンさん
（右中）ネパール マハンタさん
（左下）カンボジア ティナさん

続いて顧問の方々からもメッセージが

■清水俊弘さん

（山梨県のカフェ「おちゃのじかん」マスター・JVC元事務局長）

地球の木の立ち上げに参加したのは20代の時でした。今も3つの国で続いている皆さんの地に足がついた活動に敬意を表します。ぜひその経験を地域の若者や子どもたちにフィードバックする機会を作っていってほしい。支援地の人々の誇るべき文化や我々が学ぶべきことを子どもたちに伝える活動をしてほしいです。

■山西優二さん

（早稲田大学教授・かながわ開発教育センター代表理事）

40年近く開発教育に関わっていますが、皆さんとバナナの教材を一緒に作ったのを懐かしく感じています。当時、生活の中にきちっと学びを創り出す、そして学びを通して生活の文化を平和で公正で共生可能な文化にしていくことを共有しました。その原点は30年たっても全く変わらず、その大切さがますます浮かび上がっています。これからもそういった学びや、生活そして文化創りに向けていろいろな活動を続けていってほしいです。

■横川芳江さん（地球の木元理事長）

目先だけの変化にとらわれず、より大きな視点をもって今ある問題に取り組む姿勢が必要ではないでしょうか。これでいいのかと試行錯誤しながら動いていると思いますが、実績を見ると成功例も沢山あるので自信をもって、今までのように大きな視点をもちながら問題を考え進めて行ったらいいのではないかと思っています。

そして最後に、磯野理事長がお礼と共に「今後は、海外支援だけでなく、神奈川のNGOとして身近な外国につながる人々とフェアに共生できるような社会を作っていきたいと思っています。これからの地球の木がカラフルな多文化共生の社会を国内外で作っていけるよう願っています」と挨拶し、終了しました。

今回のイベントは、関係者全員が力を合わせ、無事に開催できました。参加して下さったみなさんに心から感謝するとともに、今回あったいろいろな反省点を次の機会にはしっかりと活かしていくようにいたします。ありがとうございました。

（30周年実行委員会　沼田 由美子）

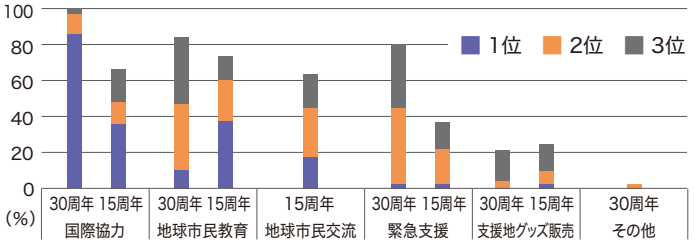
30周年記念会員アンケート

設立15周年の時にも会員の皆さまにアンケートをお願いしました。“重要な事業”は15年前と同じ質問です。比較して見ていただけるように、15年前のアンケート結果を並べました。今回のアンケートの選択肢にない「地球市民交流」が、15周年の結果で多くの支持を受けていることは考えさせられる点でした。また、“国際協力”との記載について「”国際”ではなく”民際”を使ってください」とのご意見や、選択肢にない「継続的支援と報告」を順位付けしたご回答もありました。

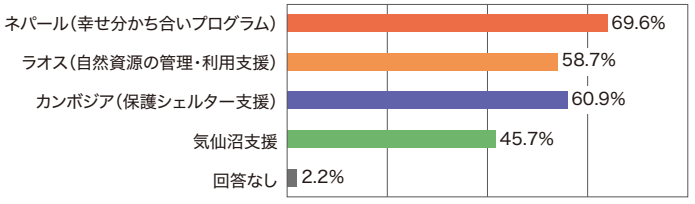
自由にご記入いただいた意見や感想では、たくさんのお祝いや応援のメッセージをいただきました。「海外の女性支援活動の継続」や「若い会員の拡充」、「コロナ禍など緊急支援の体制の準備」、多文化共生では「朝鮮学校が高校無償化から除外されていることに注視すること」などのご意見がありました。

アンケートにご回答いただきありがとうございました。皆さまからいただいたアンケート結果を今後の活動に活かせるように検討してまいります。ランチ１食500円の「一食カンパ運動」から始まった私たち市民の活動。今はコロナ禍で苦しい時期が続いていますが、地球の木が市民の共有財産となれるよう、これからも皆さまのご意見、ご参加をお願いいたします。

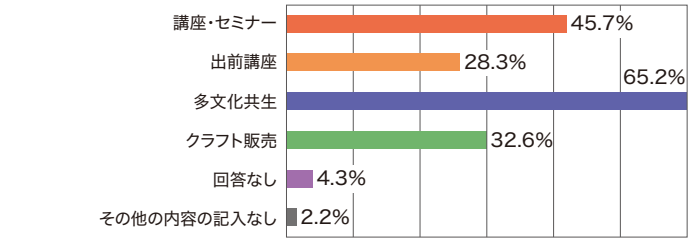
■重要な事業



■気にかけているプログラム【自立支援】



■気にかけているプログラム【国内活動】



ロシ地域の人たちの声から～支援15年の成果を探る～

「声なき人々の声を聴く」という、カマルさんのワークショップでは、村長はテーブルの上に置いた椅子に、有力者はテーブルに座り、貧しい人々は床にひれ伏します。これを体験すると、ネパールの村の権力構造が一目でわかります。声をあげるのは上層部の人たちで、貧しい人々の声は届きません。

16年前、現地NGO・SAGUNの理事カマル・フヤルさんから「私たちとパートナーシップを組んで少数民族の支援をしませんか？」と打診を受けました。その頃、ロシ地域には苦しい状況にあってもどう声を上げたらいいのか、どこにアクセスしたらいいのか分らない、そんな人々が多くいました。

ヤギが増えた!

15年にわたる「幸せ分かち合いムーブメント」を2021年度で終了し行政に移譲することが決まった昨年、私達は外部の専門家に評価調査を依頼しました。コロナ禍のため地球の木は調査に参加できませんでしたが、評価者から送られた録音にはヤギの飼育プログラムに参加した女性たちの元気な声が入っていました。「ヤギが10匹に増えました」「ヤギを売って15万ルピー（約15万円）稼ぎました」5年前調査に行った時、羨望の的になっていた女性の収入が2.4万ルピーだったのに比べると大躍進です。

評価報告書によると、女性の夫たちも「カミさんがヤギで稼いでくれたおかげで、家のローンを返すことができたよ」と自慢げです。私たちの支援が、女性の地位向上に貢献したのです。また、奨学生支援は、貧困家庭の女子を児童婚から解放し、未来を選択する自由を与えました。「この制度がなかったら、海外に出稼ぎに行かされたり、売られたりした女の子もいただろう」村のリーダーの声です。

12年生の奨学生たち

振り返ると、大地震あり、大洪水ありの15年間でしたが、村人たちが苦境に陥った時、いつもSAGUNはいち早く村に駆けつけて、村人たちに寄り添う支援をしました。村人たちはSAGUNを「家族」「困ったときに頼りになる友」と呼んでいます。

SAGUNが一番大切にしている話し合いは、村のグループ活動やトレーニングなどあらゆる場で実践されていたことが評価されました。「何故あなたたちに支援したと思いますか？」という質問に対して「（貧困から抜け出す）方法がない人に道を示してくれたのではないか」と答えた人がいました。私達の支援が暗闇に光を灯したのかもしれません。

このプログラムが終了した後もSAGUNにアドバイスをしてほしいという要望が地方政府から出ています。SAGUNと共に創った開発のモデルをロシの地方政府と村人たちが継承し、「幸せ分かち合いムーブメント」が周辺の地域に広がっていってくれることを期待します。

（ネパールチーム　乳井 京子）

幸せを分かち合った☆スタディツアー その1

村のホームステイ。鶏の声とともに暗いうちから働き始める人々、水汲み、祈り、乳搾り、かまどの匂い、野菜と豆の素朴な食事、笑顔……。ネパールスタディツアーのひとこまです。マンガルタール村でのスタディツアーには、大学生、教員、会社員、地域で活動している人など、7回で計30名が参加しました。「幸せ分かち合い」で大事にしていたことは、村の暮らしを知り、交流し、互いによい関係を築くことでした。ツアーに集った人たちは大きな役割を果たしてくれました。

「自然の中で循環型の生活をし、動物たちと仲良く暮らす村の姿は理想郷のようだった」「村の人々の深い人間関係とそこから生まれる幸福で持続可能な生活を見ると、『無縁社会』といわれる日本社会が見習うべきことがたくさんある」というような参加者の素直な感想に、村の人たちは自分たちの暮らしに誇りを感じたことでしょう。

暮らしの体験だけでなく、村人との話し合いにも学びがたくさんありました。「『開発』とは、地域の守るべき伝統と誇りを尊重しつつ、コミュニティとその個々の構成員の生活にいかに改善をもたらすかということに重点がおかれるべきだということ」。スタディツアーでの体験が、参加者たちのその後の人生に大きな影響を与えることもありました。

（ネパールチーム　丸谷 士都子）

カンボジア女性緊急救援センターからの報告

カンボジア女性緊急救援センター（CWCC）から、コロナによるパンデミックの中、2021年のプロジェクトは計画通りに実施されたとの報告が来ました。CWCCは女性の自立支援を目的にオランダやドイツの協力により1997年に３名のカンボジア女性によって設立された、カンボジアでは一番古いシェルターです。当時はレイプや家庭内暴力が多く、女性の立場が弱く、被害に遭いながら権利を主張できない女性が多くいました。地球の木がCWCCの支援を始めたのは2014年で、それ以来、毎年のように訪問していましたが、コロナ禍により2019年以降訪問することはできずにいます。

コロナ禍でのシェルター生活

カンボジアでもコロナ感染者が増え、村ごとにロックダウンされることもあり、国による規制や隔離政策の中、集団生活を求められるシェルターの運営には苦労がありました。それでも様々な工夫をして活動を継続させることができ、逆に、感染拡大する外の世界から、陰性を証明された人のみの受け入れとなり、ワクチン接種を行うなど、シェルターは安心して過ごせる場となりました。

今年度は97人のサバイバー（DV、性的被害、人身売買の被害者）と15人の家族をシェルターに保護しました。シェルターでは、被害者が幼児の場合はその家族も、そして小さな子どもがいる被害者の場合は子どもも一緒に生活します。ここで、寝食を共にしながら個別に、またグループでのカウンセリングを受けたり、職業技能訓練に参加したり、小さな子どもはデイケアで識字教育なども受けます。コロナ禍のため、法律相談や心理カウンセリングが直接できないこと、国の感染対策ガイドに沿って、新たにここに来る、あるいはここを巣立っていく被害者には隔離や書類提出が必要なことなど、コミュニティへの復帰は容易ではなかったとのことでした。

人身売買の被害者が増加

今回の報告で気になったのは、シェルターに保護された女性たちの中で、今まで減少していた人身売買の被害者が今年度は97人中84人（内未成年7人）と急増したことです。これは、コロナ禍の中で、外国にビザなしで不法就労の出稼ぎに行った女性たちが強制的に送り返されたためで、彼女たちは、行政からの依頼でCWCCや他のNGOに保護されました。この不法就労の出稼ぎの実情は、多くが親族に騙され偽装結婚させられての人身売買と言えるもののようです。

コロナ禍の影響を受け被害にあったたくさんの女性たち。彼女たちはCWCCで過ごし、心の傷を癒し自信と自尊心を取り戻し、社会に戻っていきます。そのためのカウンセリングや被害者同士の人生経験の共有はとても大切です。トラウマや精神的ストレス、そして羞恥心を克服し、家族のような親密な関係が作られます。法律相談や心理カウンセリングがオンラインになりましたが、コロナ禍で被害者を支援することができたことは大きな成果です。

地球の木の支援

そんな中、2021年も地球の木からの支援で何名かの女性たちが新たに生活をスタートさせました。地球の木の支援金は、シェルターで心身の疲れを癒した女性が新たに自活するための起業支援や生活支援、また自立に必要な職業訓練、シェルター内での医療支援、日常の食糧支援などに充てられます。

（上）シェルター内で縫製の技術訓練を受ける
（下）ナプキンの折り方を練習する

毎年、３～４名の女性に、事業を始めるための資金を地球の木が出していますが、日本の私たちが想像するビジネスとは異なり一人約３万円で起業できます。今年度は４名の女性がバナナケーキのお店やコーヒーショップ、機織りや縫製のビジネスを始め、巣立っていきました。また自活し家に戻る女性９名には生活用品を支給しました。主にお米を50キロずつで、一人約3,000～4,000円です。その他11名の被害者への医療支援、66名の職業訓練、112名に食事の提供を行うことができました。

今までの支援で新たにビジネスを始めた女性たちが、コロナ禍でも頑張って仕事を継続させていることを願っています。自立した女性たちが再びシェルターに戻ることはないとの事。CWCCのスタッフのサポートを受けて、しっかり地に足を付けて頑張っている彼女たち。カンボジアを訪問できる日が来たら、ぜひそんな彼女たちに会ってみたいです。「プーさんの織った布をチャンさんに縫ってもらい、メコン川の河畔で優しい風に吹かれてカーさんのバナナケーキとキムさんのコーヒーを味わう」そんな想像をしています。

（カンボジアチーム　成瀬 悦子）

ともに考える多文化共生の地域作り
～かながわネパール人コミュニティの人たちと～

1月23日(日)なか区民活動センター

今回は、かながわネパール人コミュニティ会長のサプコタドルラズさん、顧問のジギャン クマル タパさんのお二人に来ていただきました。日本に住むネパールの人たちが増え、私たちも身近に感じることが多くなってきています。そのようなネパールの人たちの現状と課題、お二人に現在の活動について語っていただきました。

サプコタさん

ジギャンさん

まず、最初に、サプコタ会長より「かながわネパール人コミュニティ」の説明がありました。近年、在日のネパール人が急増しており、全国で10万人近いネパールの人々がいること。そこで主に神奈川県在住のネパール人が、お互いをサポートし合ったり、日本人などとの交流を活発にするために2017年4月に「かながわネパール人コミュニティ」が設立されたそうです。

同コミュニティは地域に根付いた活動をしており、寿町の路上生活者のためにネパールカレーの炊き出しなども行っています。また、コロナ禍でも人々を元気づけるための食糧支援や苦境に陥っているネパール人への資金的支援やコロナワクチン接種に関するサポートなどの活動を行っています。今後の目標として子育ての家庭への支援、多文化共生社会づくりに向けた場づくりなどをあげられました。

次にジギャンさんよりお話をいただきました。ジギャンさんは、6歳の時、ネパールで活動する青年海外協力隊員と出会い、日本に興味をもったそうです。2000年に留学生として来日され、現在は、(公財)かながわ国際交流財団の職員をつとめながら、ネパール政府の公式通訳者として、また様々な団体でも多文化共生に関わっておられます。

コミュニティの活動を紹介するサプコタさん

感染対策は万全　ネパールの現状を語るジギャンさん

コロナ禍でのネパールの現状、2015年4月に起こったネパール地震の復興状況、ネパールの人々や文化、生物の多様性について、また在日ネパール人が当面している課題など、多岐に渡って、ときにはユーモアを交えながらお話をしてくださいました。

在日ネパール人は若年層が多く、日本生まれのネパール国籍の子どもたちも多いこと。日本語能力による言葉の問題、公的サービスへのアクセスの難しさや、在日ネパール人自身の母語や母国文化の理解への不安などがあげられました。

ジギャンさんやサプコタさんなど「かながわネパール人コミュニティ」のところにも、医療、教育、在留資格関連の相談などが多く寄せられているそうです。

最後に、ネパールではニュースが21の民族の言葉で放送されていて、それがマイノリティへのエンパワーメントにつながるほか、マジョリティに自覚させる効果もあること。また、**クオータ制**(格差是正のための人数割当て)＊を導入し、女性、先住民などの政治参加につながっていることなど、多民族国家ネパールから学ぶ点について現状をふまえて情報提供いただきました。

お二人の講師のお話の後、参加者と活発な質疑応答や意見交換が行われました。参加者は、ネパールについて日本の地域での活動に関心のある方々も多く、様々な地域での課題を共有し、そこでできるアクションについて考え合う時間となりました。

このセミナーが、生活者の視点で活動しているNGOである「地球の木」が、かながわネパール人コミュニティと連携して地域での多文化共生の場づくりを行っていくための第一歩になるのではないかと感じました。今後も多くの方々に地球の木の多文化共生地域づくりの活動に関心を持っていただけましたら幸いです。　(理事　田中 浩平)

＊クオータ制について、7ページのコラムをご覧ください。

対話カフェ～みんなで話そう！多文化共生（全3回）

第1回「身近な多文化探してみよう」

1月26日（水）メロディーココ

日本に住む外国籍の人たちが年々増えていますが、言葉の壁、文化や習慣の違い、そして、私たち日本人が持つ先入観や偏見などにより、様々な困難を抱えているのが現状です。お互いの文化を理解し合い、ともに助け合える社会にしていきたいと思います。この度、外国につながる人の多い川崎市で、外国籍の人々と共生していける社会を作っていくために何が必要なのか、人々が語り合い、自ら考える場を設けたいと、NPO法人ワーカーズ・コレクティブ メロディーと地球の木の共催で、同市幸区にある「多世代の居場所 メロディーココ」に於いて、対話カフェを開催しました。

３回シリーズの第1回目は「身近な多文化探してみよう」と題して、話し合いのテーブルについてもらいました。当日の参加者11名のうち多くは、「メロディーココ」の発信・呼びかけで来てくれました。「他己紹介」で打ち解けた雰囲気を作ってから、「メロディーココ」周辺にある様々な「多文化」スポット（料理店など）の写真を見てもらい、「身近に外国人が増えているのを感じますか？」と尋ねると、

「自分の子どもが通う幼稚園の園児の３分の１が外国人」

「職場にベトナムの人がいる」などの発言がありました。

次にグループに分かれてもらい、「近所に家族が引っ越してきて、日本語でない言葉を話しているのを聞きました。あなたはどのように対応しますか。また、相手を知るためのよいきっかけ作りはありますか」と質問を投げかけたところ、

「外国語を話していたのを聞いても、まずは日本語で話しかけてみていいのではないか」

「外国人の人は、親しくなると日本人が考える距離感以上に近くなってしまうことがある。住んでいる家について、値段がいくらですか、など聞かれた」など、これも様々な意見がありました。

そのように楽しく話し合ってから、岩波新書『対話する社会へ』（暉峻淑子著）の中にある対話の一節を手掛かりに、地域の中での外国人と私たち日本人の関係をどのように考えるかについて、話しあってもらいました。

ファシリテーターを務める山田理事

「幼稚園から園児用の袋を各家庭で作ってほしいとの通知が来たが、すべて日本語なので、外国人の母親はわからないと思う」

「ごみの分別の仕方がわからず、まとめて捨ててしまっている外国人の人がいる。でも、どのように正しい情報を伝えたらいいのか」

「注意したことがきっかけでけんかになるのが怖い」など、さらに考えていきたい意見が色々出てきました。

次回以降の「対話カフェ」

＊第2回「身近なコリア、川崎のコリアンタウン」を2月21日（月）に開催。参加者は各自、身近にある韓国・朝鮮由来の文化を探してきます。

＊第3回「私たちの中にある偏見、ヘイトクライムって何？」は3月24日（木）に行う予定です。

（多文化共生の地域づくり準備会　山田 孝志）

ネパールにおけるクオータ制

2015年のネパール大地震の後に公布された新憲法に明記されたクオータ制は、女性の政治参画に道を拓き、ネパール社会に大きな変化をもたらしました。大統領、副大統領のいずれかは女性、市町村の首長、副首長のいずれかも女性でなければなりません。また、連邦議会では、議員の少なくとも33%が女性、地方レベルでは最低4割を女性が占めることを保証し、ダリット（不可触民）と呼ばれた人々にも議席を保証しています。

カースト制と根強い女性蔑視に決別する覚悟を示した、この憲法の影響は、地球の木とSOARSが1997年から2009年まで女性のエンパワメント事業を行っていた極西部にも見られます。「識字教室で学んだ女性たちが村の役場や協同組合の要職についた」「村長さんになった」。女性のエンパワメントに生涯を捧げてきたニルマラさん（元SOARS代表）の顔がほころびます。アジアで最も進歩的といわれる憲法は、10年後のネパールにどんな変化をもたらすでしょう。そして日本は・・・。

（ネパールチーム　乳井 京子）

第23回 地球の木 総会のお知らせ

日時 5月28日(土) 13:30～16:30
会場 オルタナティブ生活館 5F「まなびや」

＊対面で開催予定ですが、感染状況等によりオンライン開催に変更する場合があります。
＊詳細は別紙の「第23回地球の木総会のお知らせ」もしくは団体ホームページをご覧ください。

幸せ分かち合い年末募金

＼ご協力いただきありがとうございました！／

今年も会員の皆さまをはじめ、**115名**の方からご協力をいただきました。
皆さまのあたたかいお気持ちに心より御礼申し上げます。

◆年末募金総額.....866,188円

〈寄付先別内訳〉

◆ネパール....152,000円　**◆カンボジア.....44,000円**
◆ラオス.....36,500円　**◆指定なし.....633,688円**

2021年にいただいたご寄付の領収書を2022年2月1日に発送いたしました。

第3回

「対話カフェ～みんなで話そう！多文化共生」

私たちの中にある偏見、ヘイトクライムって何？

ますます多文化になる地域で私たちはどのようにともに暮らしてきて、これからも暮らしていくのか、みんなで話してみましょう！

場所 多世代の居場所メロディーココ(川崎市幸区)
日時 3月24日(木)10時～11時30分
内容 第3回「私たちの中にある偏見、ヘイトクライムって何？」
申込 メロディーココ ☎044-533-8308
共催 (特非)W.Coメロディー、(特非)地球の木

デポー展示会

●3月22日㈫　東戸塚デポー

活動日誌(12月～2月抜粋)

12月
4日 第6回定例理事会
7日 デポー展示会(つなしま)
13～14日 デポー展示会(ひらつか西海岸)
22日 カンボジアプログラム検討会

1月
10日 第7回定例理事会
18日 デポー展示会(東寺尾)
23日 第2回多文化共生セミナー ～かながわネパールコミュニティの人たちと～
26日 第1回多文化共生対話カフェ
29日 ラオスプログラム検討会

2月
12日 第8回定例理事会
20日 SDGsよこはまCITY冬「ラオス発！持続可能な奪わない/奪われない暮らし」
21日 第2回多文化共生対話カフェ
23日 第2回臨時理事会
23日 「ラオスのこども」活動紹介

編集後記

◆隣の団地にインドの人たちが住み始めたのは何年前だろう。バスから見えるベランダにロープで干されたカラフルな洗濯物の家がどんどん増えていった。道で会う親子、衣服をなびかせて談笑しながら歩く夫人(多分)たち。働き盛りのビジネスマンの家族なのだろうか。楽しそうだし自信に満ちたような感じを受ける。ちょっと気になるのはあまり交じり合ってないように見えるところだ。インドの子はインドの子だけで遊んでいるし、大人も同じ。その団地に住む友人に聞いたら、うーんと唸って、「挨拶もしづらくて―」と困ったように笑った。うちの近所の多文化共生の話。 (K.S)

特定非営利活動法人 地球の木 EARTH TREE